

平成30年度 国東市：大分県学力定着状況調査結果（小学校：国語）

1 結果のポイント

- ・偏差値は知識・活用ともに50を上回った。昨年度に比べると、知識が2.5ポイント、活用が2.6ポイント上回った。

偏差値	小学校国語		
	知識	活用	全体
国東市	52.1	52.7	52.5

領域別の正答率と偏差値

- ・領域別ではどの領域も正答率は目標値を上回った
- ・領域別の偏差値も、どの領域も50を上回った。
- ・問いの内容別に見ると、全ての内容で正答率は目標値を上回ったが、「話し合いの内ようを聞き取る」「漢字を書く」「説明文の内ようを読み取る」「ポスターを作る」において、正答率が目標値を下回っている問題があり、課題があると言える。

領域	正答率		偏差値
	国東市	目標値	
話すこと 聞くこと	64.0	60.0	51.3
書くこと	79.8	61.3	53.5
読むこと	80.9	75.7	50.1
伝統的な言語文化と 国語の特質に関する事項	81.0	71.3	52.4

2 課題が見られた問題と指導の改善事項

(1) 話すこと・聞くこと（書くこと）

①司会の役割として、参加者の発言の共通点をまとめることができる。(1)(3)

正答率 34.0%・目標値 40.0%【活用】

- ・会議における提案には、提案する事柄とその理由が含まれている。そのため、司会者は会議の目的を念頭に置きながら発言内容を聞き、意図、それぞれの違いや共通点などを聞き分け、整理することが必要となる。
- ・授業においては、司会を含む話し合い活動を設定することが望まれる。また、各学年の段階において様々な話し合い活動を設定し、目的に合った司会を行う経験をさせることが求められる。
- ・内容としては正答に近いものの、空欄に合うような話し方で書いていないため、正答になっていない児童が11.4%いる。日頃から表現する場面において話し方や書き方において不十分な点が見られる時には丁寧な指導が必要である。

(2) 読むこと（書くこと）

①段落の役割を理解して、文章の内容を的確に読み取ることができる。(5)(3)

正答率 74.5%・目標値 75.0%【知識】

- ・説明的文章の段落相互の関係をとらえたり、まとまった分量の文章について話題をとらえたりする力が必要となる。キーワードを見つける、要約する、小見出し・大見出しをつける、接続詞などに注意する、全体構成を考えるなどが盛り込まれた言語活動の経験を通して付けたい力である。
- ・「読むこと」については、付けたい力にふさわしい言語活動が行われることが重要であり、きめ細かい指導をすることも不可欠である。

②求められている情報を取り出し、適切な言葉で表現することができる。(6)(1)

正答率 29.9%・目標値 30.0%【活用】

- ・決められた観点をもとにデータを比較してその結果を整理し、分かったことを適切な言葉を用いて記述することが必要である。例えば、一つのグラフを取り上げて全体的な特徴や変化の特徴を捉えたり、複

数の図表やグラフを比較・関係づける学習などを通して、図表やグラフの読み方を理解することができるように指導することが考えられる。

- ・データを読み取るポイントとしては「何についてのデータなのか」「意図することを述べるには、どの言葉や数字に注目すればよいか」「注目する言葉や数字が何を意味するのか」などについて確認することが挙げられる。
- ・一般的に、図表を使ってデータを比較する場合は読み取りやすいが、数値として示されたものについては、読み取りにくいものもある。レポートや新聞などをまとめる場合に工夫させていくポイントにもなる。

(3) 言語の特質に関する事項について

①第4学年配当漢字を書くことができる。(2)(2))

①さんかする

正答率 62.5%・目標値 70.0%【知識】

②池のしゅうい

正答率 41.3%・目標値 60.0%【知識】

- ・国語の特質に関する事項については、言語活動を行う中で指導する他、取り立てて指導することが有効である。
- ・漢字や文法については、繰り返し学習することで定着度が上がる。繰り返し学習できる環境を学校全体(家庭学習も含む)で整えることが大切である。

3 指導の改善のポイント

(1) 適切な言語活動とその充実が図られる単元設定を行う

- ・国語科の言語活動は、児童の目的意識や必要感をかき立て、単元で一貫した問題解決を旨として位置づけるものである。また、言語活動を通して付けるべき力を児童に身につけられるようにするため、付けたい力及び指導事項を明確にして、言語活動を設定することが重要となる。
- ・単元を構想する際、付けたい力とそれにふさわしい言語活動、教材はどのようなものかを適切に判断することが求められる。そのために、
 - ①マトリクス型の年間指導計画を作成し教材と指導事項を確認すること
 - ②学習指導要領の言語活動例の確認をすること
 の2点については早い段階で行っておく必要がある。また、①は年度内に随時見直しをする。
- ・国立教育政策研究所作成の
 - * 「全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例」
 - * 「小学校国語科映像指導資料～言語活動の充実を図った『読むこと』の授業づくり～」
 等を参考にすることも有効である。

(2) 多様な図書資料等を活用する授業の推進

- ・目的に応じた読み方を身につけさせるために、多様な図書資料等(書籍、新聞、リーフレット、パンフレット、説明書等)を活用する言語活動を行うことが必要である。また、考えを深めたり広めたりするためにも、情報を比較したり関連づけたりして指導することが必要である。これらを支えるためにも、児童自らが多様な図書資料を手取るようにさせることが重要である。

質問紙	「あなたは、この1か月の間に本を何冊くらい読みましたか。」(単位は%)									
	0冊	1～2	3～4	5～6	7～8	9～10	11～20	21～30	31以上	その他
全国	5.3	17.3	19.7	16.4	11.1	11.3	9.8	4.1	4.7	0.2
大分県	6.1	14.2	15.5	14.1	9.3	12.8	12.0	6.1	9.5	0.4
国東市	3.8	10.8	17.3	14.6	12.4	16.8	11.4	7.6	5.4	0.0

- ・質問紙からは、1か月で1冊も本を読まない児童の割合は全国・県より少なく、9冊以上読んでいる多読の児童は多くいることがわかった。まとまった量の文章を素早く読むことが苦手な児童の学力を育成する基盤として、また、豊かな思考につながる豊かな語彙形成のためにも本に慣れ親しませることが求められ

る。

- ・不読者をゼロに近づけ、より一層本に慣れ親しませるために、一斉読書や教科の授業中に図書館の利活用を推進していくことが大切である。

(3) 主体的な学びを促す「めあて」等の設定と指導に生かすことができる「より具体的な評価基準」を設定する

- ・1時間の授業において、学習の見通しを持たせ、自分の学びを認識させることが重要である。そのためには適切な「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の設定が必要となる。また、「振り返り」も言葉による見方・考え方の深まりが見え、今後の学習の展望が述べられるものであることが望ましい。
- ・単元の評価規準→指導過程の評価規準→本時の評価規準という道筋で、より具体的な評価規準「B 概ね満足できる」状況を想定する。また、適切な評価の場面や方法も考える。
- ・具体的な評価基準から本時のめあてを設定していくこと、また、評価規準に基づき「C 努力を要する状況」の児童を見極め、「B 概ね満足できる状況」になるよう効果的な支援を行うことが必要である。
- ・個に応じた指導のためには、評価基準の具体化、具体的な指導・支援を指導案等に位置づけるなど、事前準備等も重要となる。

(4) 国語科授業で取り組むべきこと

- ・国語科では必要な言葉を使用し、思考を深めることが重要である。どのように思考するのかをきちんと理解させるためにも、既習の語句（例えば「修飾する」「引用」「要約」「要点」など）がどのようなことであるかを理解させて意図的に使用させる必要がある。そのためにも、少なくとも教科書の巻頭・巻末等にまとめられている学習用語はその学年で確実に理解させることが大切で、指導者はあいまいな言葉を使わないようにしなければならない。
- ・言語活動の成果物を掲示・展示することは、励みになるとともに互いに見合うことで、ものの見方や考え方が広がる契機にもなる。

(5) 学校全体で取り組むべきこと

- ・漢字や語句、文法、表現技法等の確実な習得には、繰り返し練習が不可欠である。繰り返し学習できる環境を学校全体で整えたり、国語科だけでなく各教科のノートや家庭学習等、様々な場面で指導したりすることが望まれる。
- ・様々な力を下支えするものとして、活字に親しむことが必要である。多様な図書資料を自らが手を伸ばすように指導し、全校一斉読書や各教科及び領域において学校図書館を活用していく。そのために、学校司書と連携し、バランスのよい読書指導をすることが重要である。また、学年が上がるに従って、本だけでなく、新聞、インターネット、テレビ、ラジオ等の様々な情報を活用することも求められる。
- ・県「フォローアップシート」、くにさき地区研作成「フォローアップシート」等を効果的に活用する。